

演目『六浦クリ』-独吟

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1		それ四季折々の草木おのれの時を得て	四季折々の草木はそれぞれの時折に従って	
2		花葉様々の其姿を	花が咲き、紅葉し、様々な姿を見せるのに	
3		心なしとハ誰かいふ	誰が非情な心ないものだと言ったのでしょうか。 そんな事、ありません。	

① 【六浦の物語】

鎌倉時代の歌人、藤原為相(ふじわらためすけ)

の詠んだ和歌、

「いかにして この一本に しぐれけん

山に先だつ 庭のみみぢ葉」

能『六浦』はこの和歌をもとに作曲されました。

都の僧(ワキ)は陸奥の国への旅を思い立ち

道中、相模国六浦にある称名寺に立ち寄ります。

(能の謡本には「相模国」と書いてありますが

実は六浦の里があったのは「武蔵国」です。

現在の神奈川県横浜市金沢区に

称名寺はあります。)

称名寺はまさに紅葉の盛り、素晴らしい景色

でしたが、その中で一本だけ紅葉していない

楓の木がありました。不思議に思っていると

一人の女性(前シテ)が現れ、その木が

紅葉しないのは、昔この木が他の木よりも早く

紅葉した時に藤原為相が美しさを称えた

「いかにして」の和歌を詠み、その榮譽を

「功成り名遂げて身退くはこれ天の道なり」

という老子の教えに随い、

紅葉しなくなったのだと教えます。そして

実は自分はこの楓の木の精だと言い、

甲いを頼み消え失せます。

僧が夜もすがら読誦していると先程の女性が

本来の楓の精の姿をして現れます。(後シテ)

四季折々の季節の草花を語り舞い、

夜明けと共に消え失せます。

「草木国土悉皆成仏」心の無い草木までも

皆成仏できる事をテーマにした

典型的な草木の精霊の物語です。

紅葉しない決意をした楓の精がシテなので

「色無物」、つまり若くはないシテを意味します。

地味な曲のように思われますが、楓の精の
芯の強さ、また物語る折々の草木の美しさが
ありありと目に浮かぶ曲です。

② 【霜月】

今回のテーマは「霜月」。11月です。

能『六浦』は明確に11月の曲というわけでは
ありませんが、ちょうど秋も深まり紅葉が
美しい季節。秋という背景にぴったりだと思い
選曲しました。